

全小国研会報

No. 100

発行所
全国小学校
国語教育研究会
事務局
墨田区立
第一寺島小学校
事務局長 高橋誠人



主体的対話的に学び深める「全小国研」

会長 長沼 正城

「21世紀を拓く教育は、質的に大きく転換しなければならない。深く思索する子供の育成を目指す時代の到来である。」とは、全小国研の立ち上げを強く推進され、草創の礎を築かれた功労者の言葉である。

「質的に大きく転換」との叫びは、今、現行学習指導要領のもと、その実践は個々の思い思いの中で展開されている。

今回の夏季セミナーにおいても、その「質的転換」を強く意識して「主体的対話的に学ぶ児童の育成をめざした国語科授業の創造」とした。

私自身、「質的転換」を次のように見ることがある。

一つは、教師が引張ったり、教師が問いを示したり作業させたり、教師がまとめて「はい、わかった人！」となる授業から、児童がもっと知りたい、もっと考えたいとの問いをもち、児童が必要に応じて話し合ったり書いたりする「したい」を大事にした「児童が主語」になる授業への転換である。

もう一つは、話し方、読み方、書き方等の言葉に関わる知識・技能を習得していくという学習過程から、「わかる」「わかる」「できる」との感動と挑戦と自信が高まる学習過程への「転換」である。特に「対話」の過程は大事な要素が含まれている。相手の考えに謙虚に耳を傾け、自分の考えを安心して集中して話し、質問には素直に答える活動となる。そこには第三者の思いの発言はなく、程よく引き締まった空気感の中でお互いの信頼感の中で話題に向き合う。人として「思いやり」を発揮する機会ともなっていく。ここの協働する価値も見えてくる。この「対話」の熟練は、言葉が心を耕すと過程ともいえる。「言葉は心」、人間形成に深く寄与する所以だと思う。

さて、今回の模擬授業と講評、特別講演等の中から、その「転換」のためのヒントを探ってみた。

模擬授業者の村地和代先生は言われた。「自分のタイミングで、話してみたい人のところへどうぞ！」と。普段からの「児童理解の深さ」と「鍛え」がないと出てこない言葉である。また学習者自身に、「○○したい！」という思いを駆り立てる教師の仕込み(自由)に選べる10の事例を準備する熱量)も重要であった。「質的に大きく転換」するためには、相応の準備が必要である。一つ一つの資料から得た情報を「つなぎあわせ」、少しでも話したくなったら、対話をしていく。そこでの「言葉の出会い」から考えが広がり深まりしていく児童の姿。そこでの気付きを言語化していく過程で学習者は自己実現を図ることができる。まさに「子供が主語」となる展開であった。「感動・挑戦・自信」を教師自身が体験し実感したこと自体に価値があった。

午後の水戸部修治先生のお話には、共感と感銘を深くした。

○「問い」とは、支援を要する児童も「それやってみたい！」になること。
「みんなの問い」は本当に「一人一人の問い」になっていきますか。と。
○学びの必然性、魅力あるゴールの言語活動は、子供任せの放任学習指導ではない。子供たちが自律的に学べるような緻密な手だてが重要になる。
◎「さあ、書いてみよう！」となっても、「書けない」という子が一定程度いる。その子に一体どんな手だてをとるのか。その「手だて」がその子の個別最適な学びのポテンシャルを最大限に伸ばすことになる。

私自身、書き出すことに、困難な児童への「手だて」は、個別支援で賄ってきたが、正直思いあぐねていた。授業中よく使われる教師の「手だて」のサイドライン(着目した言葉に線を引かせる手だて)や、吹き出し(想像した言葉を吹き出しに書く手だて)と同じように、なかなか書き出せない児童に言語化させる手だてはないものか。それを「話したようにもう一度つぶやいて書き出す」と言う。まさに目から鱗であった。発見と感動に胸がすくような思いになった。

今回の夏季セミナー。北は北海道から南は宮崎まで各地からの参加者で会場は熱気に包まれた。集った国語教師が言葉による見方考え方とともに言語感覚を研ぎ澄ます。その修練によって一段と豊かな国語教室になるだろう。「言葉で心を耕し」「生きた言葉」を身に付ける児童が育っていくことを切に願うものである。

最後に本会報は、記念の100号を迎え、功労の先輩方にご寄稿いただいた。「人生は出会いである。中でも研究を通しての出会い、さらに人生を豊かにしていく。」との師の言葉をしみじみと思ひ出す。脈々と受け継がれてきた進取と創造の「国語教育」への思いを、次につないで参りたい。(清瀬市立清瀬第四小学校長)

「全小国研会報第100号発行」に寄せて

名誉顧問 榎原 良子

「全小国研会報第100号の発行」を心よりお祝い申し上げます。

この記念すべき節目に際し、長年に亘り会報の発行を見守ってきた一人として一言お祝いの言葉と私の知る限りではありますが、全小国研会報の歩みについて述べさせていただきます。

わが国では、二十数年に亘って国語の研究活動を支える全国組織として大・高・中・小・幼合同の全日本国語教育研究協議会（全国協）が存在していました。そして、年一回大会を開催していたのですが、年々参加者が減少し形骸化しつつありました。そのような状況下で、昭和四十年代半ばに入ると独立した組織を結成する動きが起り、高等学校、続いて中学校が新たに全国組織を結成したのです。昭和四十七年八月四日付で、当時全小国研結成準備委員会会長（朝倉秀雄氏）が全国の小学校国語研究会会長宛に小学校の新組織結成に向けての経緯と展望を発信されたのが全小国研会報第一号でした。

（朝倉秀雄氏の原稿を一部抜粋）

「どう育てていくか」

全国小学校国語教育研究会結成準備委員会 朝倉 秀雄（前略）高等学校、中学校と順次独立した組織を結成し始めた時期。準備委員会会長として小学校も全国組織を持ちたいのだが、いろいろ事情があつてできないと結成を躊躇していたところに、瀬川榮志氏（当時、都指主事）が訪問され、「全国組織結成の運動をさっそく始めようではないか。」「自分も一兵卒としてどんな仕事でも割り当ててもらいたい。」と、心情を吐露されたことが私の重い腰を挙げることになった。都道府県・特別都市の国語研究会会長と連絡をとり、結成準備委員を決定。昭和四十七年六月二十三日、最後の準備委員会を開催。この場において、結成大会の大綱はじめ会則を決定。全国小学校国語教育研究会（略称全小国研）が生まれるわけだが、問題はこれからだと考えている。それは、全小国研をいかに育てていくかということである。全小国研結成の原理は次のとおりである。（以下略）

会報第一号では、朝倉秀雄氏の他に、「おいわいのことば」（熊沢 龍氏）と特別寄稿「国語科教育はこんな問題をかかえている」（興水 実氏）の三人の執筆者のみ。A4判一ページの4段組みで編集されており、当時編集部長であった林 武男氏が担当されています。

「全小国研会報第100号」までの歩みを振り返りますと、昭和四十八年度に入り理事会、全国大会開催等の事業が始まったこともあり、ページ数を増やしB5判での発行となっています。その後、B5判、四十二ページで年二回発行されています。掲載されている主な内容は、「理事会報告、全国大会案内及び報告（公

開授業・分科会協議・講演要旨）」「事務局の活動方針と事業内容」等です。第四十八号（平成十一年度）から、内容が充実してきた「夏季セミナーの報告」の掲載が始まりました。また、本会の節目となる年（創設二十年（平成二十年）、三十年、四十年）には特集号が発行されました。さらに、第八十二号（平成二十八年）から誌面をA4判に拡大して読みやすくする等、本会の活動の共有を図るための広報活動として、毎号創意・工夫を重ねながら発行してきていただいています。

しかし、永い年月の中では財政困窮の時期もあり、集まった原稿を全て事務局員がワープロで文字入力し、校正・印刷を行って発行したこともありました。また、執筆者の皆さんには、短期間の執筆を依頼せざるを得ないこともありましたが、このように表面には映し出されない紆余曲折があつた中で、五十数年の永きに亘り会報の意義・目的を見失わずに発行されてきたことは、編集担当者の会報発行への強い想いと誠実な努力、全国の執筆者の皆さんのご協力があつたことを忘れてはならないと思います。

編集担当者となつた全国の執筆者の皆さんとの協働作業によって創り出された会報は、多様な奥行きをもたらし読者（会員）にとって考えるための情報であり、本会の研究の歩みの貴重な記録にもなっています。バトンを繋ぎながら編集に関わってくださった皆さん、そして、会報に執筆くださった全国の多くの皆さんに改めて深く感謝申し上げます。

SNSやデジタルメディアが日常的になつてきた現代において、敢えて紙媒体で定期的に発行している「全小国研会報の意義・目的は何か。」を考えますとき、全小国研会報は、単なる情報発信の場に止まらず、現代に生きる私たち一人一人に「考える契機」を投げかけてくれるかけがえのないメディアの一つであり、文字言語を通して「教育現場における今日的課題を深く考える時間の場」を提供することでもあると言えるのではないのでしょうか。そして、「小学校国語科における指導あるいは授業づくりをどのように考え、創造していくべきか。」その時代の国語科指導における課題を会員の皆さんに投げかけていただいていたと受け止めています。

「全小国研会報第100号発行」という節目は、感謝と祝福に満ちた時間であるものの、次なる第100号発行に向けた新たな一歩の始まりです。

これからも、全小国研会報発行の意義・目的を見失うことなく、そして、会報が多くの全国会員の皆さんに読まれ、必要とされる情報でありますよう祈念いたします。

全小国研 会報100号発行によせて

顧問(北九州国語教育研究会) 花村 恵

会報100号発行を心よりお喜び申し上げます。

ひと口に100号と申しますが、この会報発行に携わっていただいた歴代本部役員、編集担当者の方々には大変なご労苦をおかけしてきたと思います。まず、永年のお骨折りに心から感謝申し上げます。

私は第九回北九州大会(昭和五十六年)に授業者として参加し、以来各地で開催される全小国研全国大会に機会あるごとに参加してきました。

また、第二十七回北九州大会(平成十一年)では実行委員長を務め、全国の会員の皆様とのご縁をいただき今日に至っております。

今回、会報100号発行記念と聞き、手元に残っているファイルを取り出しめくって見ると、懐かしい思い出いっぱいです。冒頭には歴代会長様の顔写真あり、お元氣だった瀬川栄志先生の「国語教育立国論」あり、講演をいただいた各講師の先生方の講演記録もありで、ついつい過去の会報に読みふけてしまいました。

また、学習指導要領改訂にあたっては当時の文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官の講演も掲載されていて、改訂の趣旨を改めて理解し直すこともできました。

国語科授業や協議会の記録には、今日の授業に生かせるような新鮮な発想の実践もあり感激しました。大会の足あとを会報として残す大切さを今更ながら再認識したところです。

私の所属する北九州国語教育研究会(北九国研)も、会報「げんかい」を発行してきました。

昭和三十二年から三十九年の七年間は、会報というより教育論文、実践報告、教材研究、創作(短歌・俳句・随筆)なども掲載され、「会誌」としての体裁で発行されています。当時はまだワープロもパソコンもない手書き原稿の時代に、B四版十六ページの会誌が五十号まで発行された歴史が残されています。先輩たちの国語教育に寄せる情熱を感じます。

しかし、それが五十一号からはA4版八ページの体裁になっています。その理由は、発行に伴う経費と編集担当者の負担が大き過ぎて、継続が難しくな

ったからではないかと思えます。

会報も会誌も発行するだけが目的ではありません。それが研究や実践に生かされてこそ、目的が果たされるわけです。会員に読まれ活用される会報の編集が望まれます。

恐縮ですが、ここで私の昔話をさせていただきます。

私が教職に就いて二・三年目の夏休み、先輩から誘われて日光・中禅寺湖畔のホテルで開催された某全国研究大会に参加しました。ごく軽い気持ちの私に、大会役員の方が原稿用紙を示し、「この分科会に参加し、研究発表者へ質問や意見を書いて下さい。」と言われました。なお、「この質問・意見は、発表者の回答とともに次の会報に掲載します。原稿は後日〇〇宛に送って下さい」と一方的に依頼されたのです。

それからが大変でした。緊張して分科会に参加し、聞き耳を立てて原稿のためのネタ集めに神経を集中させました。

後日、会報が届き開いて見ると、私の質問と発表者の回答が並列して掲載されていたのです。私の文章が活字になった初めての体験でした。

これを機に、その研究会への私の参加態度はガラリと変わりました。今になって思うと、やる気のない若い会員を積極的に参加させる試みであったと思われる。また、会報に会員の意見を載せ、編集に変化を持たせようとした編集担当者の試みでもあったと考えられます。

教育現場を離れて久しい私の勝手な思いですが、会報はその性格上仕方ないこともかも知れませんが、一見堅苦しい構成・内容のものが多く見受けられます。いつも同じ割り付け、型にはまった内容では、たとえ新しい情報であっても新鮮な情報として受け取られ難い気がします。会員一人一人が、発行を待ち望むような会報であってほしいと思います。

なお、これからの会報発行について、すでに計画が出来上がっていると思いますが、今までの紙媒体だけでなく、時流に合わせて電子化による情報発信も試みてはどうかと考えます。そして、多くの方々に会報が読まれ、全小国研についての理解を深めていただくならば、小学校国語教育の発展にも貢献できるのではないかと思います。

全小国研会報100号発行記念を改めてお喜び申し上げます。

全小国研とのよき出会いに感謝

顧問(北海道) 庄子 剛

北海道・釧路の庄子(現北海道国語教育連盟顧問・釧路国語教育研究会顧問)でございます。全小国研会誌100号発刊のよろこばしい節目にあたり、私と全小国研との出会いや思い出などについて、心のむくまま綴らせていただきたく思います。

△基本図書とのよき出会い▽

振り返りますと、私と全小国研との第一の出会い、今から四十五年ほど前にありました。新米教師として道東釧路市の大きな小学校で教職の道を歩み始めた頃、日々の授業づくりに悩み、苦心努力する中、実践へのヒントを得たいとの思いで手にした一冊が全小国研編集による季刊誌「小学校の国語科教育⑭」子供の心をつかむ発問⑶(明治図書)でありました。当時、「主体的な学びのある授業」を行うため「最適な発問のあり方」について知りたいという願いから買い求めたものでした。

表紙をめくりまずと目次に続き、「発問は指導技術の主役」という瀬川栄志先生の「指導法は単なるテクニクではない」という主張があり、田近洵一先生による「学習者とは問いに答える人ではなく、問いを持つ人であり、さらには問いを発する人である。つまり、問うこと自体が学習なのである」との立場から「子どもに生きる発問と条件」という特別寄稿文があり、私の心をとらえました。

また、当時、企画編集局・庶務部長であった榎原良子先生(現名誉顧問)が、「企画編集局からこんにちは」として、地域の研究会に参加した折の「作家・曾野綾子氏」の講演内容について紹介なされて、「毎日の授業につながる実践の書を全国に伝えたい」との強い思いを感じたところでした。

かくして、私の国語教育実践の基本図書として、今も書齋に居場所を占める「大切な一冊」を手にしたことが、私と全小国研との第一の出会いでありました。

△研究大会でのよき出会い▽

そして、時が過ぎ、退職の年に校長をつとめる自分の学校(釧路市立鶴野小学校)を主会場に第四十七回全国小学校国語教育研究大会北海道釧路大会を開催する機会をいただいたことが第二の出会いとなりました。

当時、北海道では北海道国語教育連盟(当時、川嶋英輝前委員長、齋藤昇一委員長・若松広美事務局長)のもと、北海道各地の国語教育研究団体が連携して向こう

十年間の全道規模の大会開催地が決定しており、そうした中であって平成二十九年度大会を全小国研大会との共催という形で受けてほしいとの要請でありました。私としては、若き日の憧れの皆様からのお話であり、とても名誉なこととの思いで地元役員の全面的な賛同のもとお受けしたところでした。

釧路国語教育研究会では、組織立ち上げ草創期より「釧路の子どもたちの学びの笑顔と若い実践者の情熱が輝く大会を目指す」ことに重きを置いています。そのため、当時も大会開催五年前から毎年、釧路管内の市町村教育委員会への支援要請訪問を行い、釧路管内全市町村からの授業者・提言者等の選出(オール釧路での大会開催)を願いました。

また、研究理論については、新しい学習指導要領(当時)が求める「主体的・対話的・深い学び」の具現化を目指し、大会三年前にはその内容を確定させ、実践の積み上げを何より大切に準備を行いました。研究主題を「新たな価値を生み出す国語科の創造」小中九年間の主体的な関わりを促す確かで豊かな言語活動を通して」と定め、釧路の国語科年間指導計画「釧路プラン」の活用を基盤に「主体的に言葉を使いこなす力」を高める授業づくりの具体策を発信したところでした。そして、この点につきましては、講演講師としてお招きした文科省教科調査官(当時)菊池英慈先生から十年先を見通した授業づくりへの道筋を明るく照らすご示唆をいただき、私たちが求める「主体性の在処」をしっかりと見据えることができました。

お陰様で、全国各地から多くの皆様のご参加をいただき、当地の若い実践者が全国大会というより広く明るいステージで自らの実践を発信し、力量を高め、指導への自信を深める大会とすることができたように思っております。大会成功に導いてくださった名誉顧問榎原良子先生、元会長川畑庄二先生、元事務局局長佐伯孝司先生をはじめ、全小国研の皆様とのよき出会いに改めまして心からの感謝を申し上げます。

あれから八年。かつて若手であった者が中堅教員となってコロナ禍の中で第七十七回北海道国語教育研究大会釧路大会(令和四年度・松岡伸之大会運営委員長・釧路市立景雲中学校)を見事成功させ、更に現在は、来たる令和十一年度開催予定の釧路で十回目となる全道大会の実施に向かって着実な歩みを進めています。全小国研の皆様とのよき出会いが、当地の次代を担う人材を育て、その後の実践活動の中核となっておりますことをここに伝え、感謝の言葉とさせていただきます。

夏季実践交流セミナー特別講演

演題「主体的・対話的に学ぶ児童を育む国語科の授業づくり」

元文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官

元国立教育政策研究所 教育課程調査官・学力調査官

京都女子大学教授 水戸部 修治 先生

通常級に支援の必要な子や外国籍の子が増えている中で、令和三年一月の中教審答申では「個別最適な学び」が掲げられた。これは、教師視点からではなく、学習者視点から整理した概念であり、子供を主語にして考える必要がある。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するためには、①「言語活動を通して資質・能力を育成する」という国語科の本質的な授業改善、②常に「その学びは子供にとって必然性を実感できるものか」を問うこと、③子供が自律的に学び進めるための緻密な手立てが必要となる。子供が魅力的な言語活動のゴールに向かって自律的に学習していく、ロングレンジの学習活動が求められる。

一 国語科の授業づくりと評価の基本的な枠組み

国語科の資質・能力は、言語活動を通して育成する。資質・能力とは指導事項であり、「読むこと」の精査・解釈を系統的に見ると、低学年では場面の様子、中学年では場面の移り変わり、高学年では全体像となっている。(以下、具体的な授業実践事例をもとにご講演いただいた。)

【事例①】二年「ふたりは」シリーズの大好きを紹介しよう

C (1) エ 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。

大好きなお話を読んで、大好きな場面をペープサートで紹介する言語活動。動きと会話を考えることで、登場人物の行動を具体的に想像することができる。子供が演じているのは、教師が指定した場面ではなく、お話全体の中の大好きな場面。その際に、子供たちの視線はペープサートではなく、文章にあることが重要となる。教師がモデル提示をする際にも、ペープサートを動かす時には本文を見ている姿を見せる。

本単元では、大好きなお話の大好きな場面に着目して、場面の叙述を基に、叙述に書かれていない行動や会話をいかに想像して付け足しているかが、評価のポイントになる。

【事例②】二年 言語活動…ジンカード

C (1) オ 文章の内容と自分の体験とを結び付けて感想をもつこと。

教師による言語活動のモデルは、指導事項の才をターゲットにして作っている。言語活動のモデルは枠組だけでは不十分であり、中の文面もねらいを明確

にする必要がある。児童のペア交流においても、「自分も同じことあった？」という話型を使い、指導事項を確実に身に付けさせる手立てをとっている。本単元においては、友達とたくさん交流をした後に、大好きなところとそのわけを言語化して書いている。従来行われてきたような、書かせてからの交流ではない。いざ書こうとしたときに、手が止まってしまう児童もいるため、書き始める前に、もう一度自分で声に出すという手だてをとり、話し言葉を書き言葉に変換させている。

【事例③】二年「読んでね」カードでお話を紹介しよう

C (1) イ 場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。

本単元では、自分のお気に入りの本で「読んでね」カードを作るために、「だが、どうして、どうなったか」が分かるところに付箋を貼って、交流している。その際に、付箋を機械的に説明するだけの作業とならないよう、大好きな場面とそのわけも伝えている。「自分の大好きなお話の大好きな場面を友達に伝えたい、ただ、友達はそのお話を知らないため、誰がどうしてどうなったのかを伝えたいといけない」という、細かな目的設定がされている。

低学年の指導事項は、内容を「大づかみに捉える」である。場面ごとに細かく時間をかけながら捉えたり、教科書のあらすじだけを捉えたりするのはない。本や作品の題名、挿絵などを手掛かりにししながら、誰が、どうして、どうなったかを把握することを繰り返していく。

【事例④】二年「すごい」と思う植物のことを紹介しよう

C (1) ア 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。

説明文におけるマトリックス表では、縦軸には、「イチゴ」「スイカ」のように内容が示されており、交流相手が決められない児童に対して、少し心配な子は同じ植物(食べ物)を選んでいる子と、自信を持っている子は違う食べ物の子と、というように判断の例を示す。児童は、自分の大好きな食べ物のことをいきいきと話す、教科書教材のタンポポでは、この姿は引き出すことは容易ではない。児童一人一人の意欲を高めるのは、教師から与えられたものを読み取ることでなく、自分で決めることなのである。

二年生の児童が本のリード文を読んで、内容の大体を捉えることができるようになった手だての一つに、教師によるペア交流のモデル動画がある。冒頭で目次からページを選ぶ、ページを開いたらリード文を指差しながら読む、友達に質問をする、などの具体的なやり取りを見せる。

もう一つの工夫が、単元の指導過程の重点配分を、指導のねらいに応じて変えているということである。C「読むことのアとイ(構造の内容と把握)」に重点

を置く場合、第一次「色々な本を読み、あらすじを把握した中から紹介する作品を選ぶ」時間が長い。段落ごとに、問いと答えの関係性を考えるのではない。子供たちに本当に付けたい力は、教科書教材を越えて、本で調べながら、どんな課題解決のための情報を集めていく力だと見通した時に、授業改革を行うことができるのである。

二 国語科の単元・授業づくり

【事例⑤】二年 「ふたりは」シリーズの好きを紹介しよう

C (1) エ 前掲

並行読書マトリックスでは、読んだら黄色シール、好きな話は緑シール、さらに大好きで紹介したい話はキラキラシールというように、色分けシールを使い、これをもとに子供たちが判断して、ペア交流をする。

ペア交流では、児童は空いている席を見付けて横並びで座り、自分の大好きなところをいっぱい交流して、その場面が大好きなわけをはっきりさせてから、大好きカードを書く。書かせてからの交流では、書いたものを棒読みして終わってしまう。付箋でも同様で、付箋に細かく書かせすぎると、本文ではなく付箋を読み始める。「どうしてそう思ったの?」「自分だったらどうする?」というやり取りをし、ペア交流が終わると、子供たちは次の交流相手を見つけて、またペア交流をする。これにより、低学年でも三十分間、集中度高くペア交流をすることが可能となる。並行読書マトリックス、モデル動画といった様々な手だてで、一人一人を確実に支援していくのである。

そのための授業構想として、最初に考えるのは教材ではなく、子供たちが、どんな本を読んで、何に興味をもっているのかという、子供たちの姿である。

そして、その子供たちに身に付けさせたい指導事項は何か、その子供たちにぴったりの言語活動は何かを考えていく。中学年の指導事項「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像する」に関して、昭和から平成の始めの頃によく見られた実践は、①全文を通読し、初発の感想を書く、②場面分けをする、③場面ごとに読み人物の気持ちを考える、④教師が提示した場面と場面を比べて気持ちの変化をまとめる、⑤何でもいいたからわかったことをフリップにまとめる、といったものだった。しかし、解説国語編には、「複数の場面の叙述を結び付けながら、気持ちの変化を見出し、と書かれており、「気持ちの変化を捉えて読み取っていく」とは書かれていない。また、「どの叙述とどの叙述とを結び付けるかによっても変化やそのきっかけの捉え方が異なり」という記載もあり、教師が「最初と最後の場面を比べて」と言ってしまうのは、どの場面とどの場面とを結び付けるのかを考える学

習機会を奪うことにもなりかねない。

教科書の中にも「問いをもとう」とあるが、その「問い」とは何なのか。教師に選ばれた「○○くんの課題」ではない。例えば、自分がどの物語のどの場面を紹介したいのか、その物語を選んだのはなぜなのか、自分はその理由をどんな言葉でどう説明するのか、という自分を主語にした一人一人の課題である。だからこそ、一人一人の好きやお気に入りを入りを大切にしていこう。

これまで、教材を与えて段落ごとに読み取り、最後に要旨を考えるという授業をしてきた。これでは、何のために要旨を把握するのが分からない。いろいろな資料があつて、その中で自分が追求したい資料を選ぶために、一読してどういうことが書かれているかがわかるのが、要旨の把握である。高学年の要旨の把握力は、およそ一読して内容の大体が分かるという力であり、何時間もかけて最後に分かるだけでは、生きて働く力につながらない。

三 ロングレンジの学習活動を中心とした多彩な手だての構想

【事例⑥】一年 じどう車クイズを作り、お家の人にクイズを出そう

C (1) ウ 文章の中の重要な語や文を考えて選り出すこと。

モデル動画では、マトリックス表で相手を選ぶ姿、友達に声を掛けて確実に座る姿を見せる。カメラは二人の後ろから撮っており、本の中の見出しを確認し、リード文を指差して交流する姿も丁寧にモデル提示している。かつての実践においては、一年生のペア交流の前には、話し方名人・聞き方名人を確かめることであつた。それで確かめられる内容はごくわずかであり、何を話すのか、どこを指差すのかといった具体的な所作まではイメージさせられなかった。動画等を活用し、従来以上に丁寧にモデル提示をしていくことが指導上大きな効果を生む。

子供同士の交流の中で「友達と相談して、これにした」と話す子がいた。読みが深まるというのは、教師が深める発問をするからではなく、思考ツールを使わせるからでもない。自分の追求したいターゲットとなる言語活動に向かって、文章を読み合いながら十二分にペア交流をしていったときに読みが深まるのである。教師による発問で教科書を読み取らせ、一定の子たちが深く読み取る状況は、実は元々読める子の読みを表出しているだけ、ということはないだろうか。そうではない子供たちの姿をもつぶさに見取ることが重要である。例えばロングレンジでのペア交流中、教師は教室全体を俯瞰しつつ、支援が必要なペアの間に入る。そして教師は子供と同じ視線で、ペアをつなぐ声掛けを繰り返して丁寧な支援を続けていく。このことで子供の姿が精緻に見えてくる。こうした、子供の主体的な学びを引き出す授業改善を断行することが重要である。

【文責】小田 千郷

夏季実践交流セミナー・模擬授業と授業考察

授業者 滋賀県湖南市立石部南小学校 教頭 村地 和代 先生

【テーマ】複数の資料を読み、分かったことや考えたことをまとめよう

（『言葉の変化に関する資料』）

― 令和七年度 全国学力・学習状況調査

読むことの問題に学ぶ授業改善のメッセージ―

【教材名】『言葉の変化に関する資料』

一 実践の趣旨

令和七年度 全国学力・学習調査 読むことの調査結果から、目的に沿った資料を選び、精査・解釈の力を付ける授業づくりを考える。

二 実践のねらい

文章の構成を捉えて要旨を把握し、目的に応じて文章と図表を結び付けるなどして必要な情報を見付け、自分の考えをまとめることができる。

三 模擬授業の実際

(一) 『文化庁 国語科の勘違いしやすい日本語』を読み、興味をもったこと・調べたいことを決め、全体共有する。学習のゴールを確認する。

(二) 資料『とてもできる？できない？（飯間浩明 「日本語をつかまえる」』を読む。資料の読み方と自分の意見もち方を確認する。

要旨を捉え、文章の全体、具体的な事例、それらに対して自分が調べたいことと合っているか考える。

(三) 興味をもったテーマに沿ったグループピングで集まり、個人で十種類の資料を読み取る。自分の意見の根拠となる資料を選ぶ。

(四) 読み取ったことをもとに、グループで意見を交流する。

選んだ資料について話す。理由や調べたいこととどのように関係しているのかを話す。

(五) 「言葉の変化」について興味をもったテーマを中心に自分の考えをまとめる。

四 授業者より

○ 教材の工夫として、国語科で大切にしたい「言葉」を扱った。言葉の変化についての色々な考えは示されているが、具体的な事例は挙げられていない資料を選んだ。文化庁や子供たちが知っているだろうという言葉をクリックアップした。

○ 学習指導要領解説国語編の「精査・解釈」（説明的文章）では、興味のあることから必要な情報を選ぶと言っているため、必要な情報は、目的に応じて変わるものである。読み手の知りたいことを知るために情報を集める力を付けなければいけない。

○ 「言葉は生きている」と言われている。言葉は面白い、もっと知りたいと心が動くような授業をつくっていききたい。

五 質疑応答

Q 資料は単一の方がよいのでは。

A 同じ興味関心がある児童たちと話し合う活動を取り入れ、子供たちが問い直すことを大切にしたい。教材が多いときには、並行資料マトリクスを使うのも効果的かもしれない。自分が交流したい相手を選べるのが意欲に繋がる。

Q 広がった答えのない学びをどう価値付けていくのか。

A 文化庁も最終的な答えは言っていない。答えがないからこそ、多数の資料を読み、友達の意見を聞く。どう関連付けたのか、どう再構築したのか、思考のプロセスを聞き、学びに繋がる。

六 授業考察

前 国立教育政策研究所 学力調査官・教育課程調査官

横浜市教育委員会 教育政策統括部 教育政策推進課 主席指導主事

渡辺 誠 先生

○ 楽しい活動の中で確かな学力を付ける授業であった。

① 資料を選ぶ楽しさ：「詳しく知りたい」「どういう意味か」など読む目的の明確化ができていた。

② 情報を繋ぐ楽しさ：目的に応じて必要な情報を見付けたり、必要な情報を取捨選択したりすることができていた。自分の考えの根拠となる具体例をアウトプットする力を付けることができる。

③ 友達と語り合う楽しさ：他者の考えと出会い、言葉と出会う。

④ 自分の考えをまとめる楽しさ：正解がない自分の考えをまとめる楽しさがあった。自分との出会いである。

○ 全国学力学習調査では、無回答が十六%であった。情報をうまく繋がられない子やアウトプットできない子を何とかしてあげたい。

○ 児童の回答をどう評価するかは、納得したこと理由を他の資料から見付けて、再構築して繋げるという指導が必要である。子供たちを評価し、褒め、手だてを考えていく指導が必要である。

【文責】彦坂 真な子

夏季実践交流セミナー 授業実践発表と協議会

【第二分科会】書くことよさを実感できる単元づくり

― 絵から想像したことを対話も生かして物語に書く〈共有〉 ―

【発表者】

東京都江東区立第五大島小学校 藤村 由紀子 先生

一 主な発表内容

○「どんなおはなしができるかな(光村図書一年下)」「(五時間)の実践報告
十一月に実践①、二月に他校で実践②を行った。

○子どもたちが「ぜひやりたい」と思うように、児童の思考を促すモデル文や学習シート、資料の提示などを工夫した。特に、ペープサートは、児童が手に持つとすぐに話を始めており、お話の想像をふくらませやすかったり、対話する活動を楽しんで行うことができた。

○実践①は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の複合により、物語そのものを楽しむまでに時間がかかってしまった。そのため、実践②では、「書くこと」に焦点化することで、児童が学習活動へ取り組みやすくなった。

○実践②では、共有段階の対話で、物語の「わくわくするところ」にシールを貼り、わけを伝える活動にした。このことで、「わくわくする物語」が書けたかを明確に意識することができた。

二 主な質疑応答

Q 支援が必要な児童へどのような支援を行ったのか。

A 具体的なイメージをもたせるために、教師が二人で①絵を動かしながら話す②今話した言葉を黒板に書く、を繰り返し行い、児童がワークシートを作る過程をロールプレイングで行った。

Q 児童の文章の間違いに、教師はどのように気付かせたのか。

A 児童の「できるようにしたい」という意欲を大切にするために、教師は間違いをあまり指摘しなかった。とっておき「かいわぶん」、ことばメニューなどを提示し、自分で見直せるようにした。

三 指導助言

全国小学校国語研究所 依田 雅枝 先生

○低学年国語科は、言語活動を意識的に学ぶ第一歩である。学ぶことよさの実感こそが大切である。幼児期の音声言語中心の言語生活から、文字言語を含む言語生活へ成長していく。低学年は、言語活動を意欲的に行う。言語活動は学力の中心である。

○「書きたい」子供を育てるためには、「書くこと」の必要性を感じ、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」とそれぞれ支え合っていく。

○実践①は複合単元だったが、実践②では「書くこと」に焦点化しており、児童と教師の実態・状況に照らして変更したことがよかった。

○一年生でも能力差はある。それでも、自分でできることを喜んでいく。「書くこと」は必要に応じて、書き慣れてくる。児童が主体的に「したい」となれるように、伸び伸びとさせることが大切である。

【文責】 棚橋 香織

【第二分科会】子供が変わる！共感から始まる説明文指導

「さけが大きくなるまで」を通して、個別最適な学びで育む主体性と自己肯定感

【発表者】

八王子市立由井第二小学校 川畑 操 先生

一 主な発表内容

○個別最適な学習への配慮、感想や疑問の共有と共感を重視した交流、主体的な学習への動機づけについて実践事例を交え発表を行った。

○三色サイドラインによる「時・場所・様子」の視点明確化・俯瞰できるワークシート導入、自由な話し合いの場作り、児童ごとに課題設定した。

○評価方法としては、ワークシートは三種類用意し、個人の実態に応じてそれぞれ選択し記入を促した。コメントも可能な限り記載をおこなった。

○成果としては、児童の読解力・自己肯定感の向上がみられたこと、個別最適な学びへの準備と実践ができたことがあげられる。また、学習集団としての学ぶ意欲を底流にした風土醸成、学級内での意見交流の活性化もあげられる。

○課題として、発表メモ作成や話すスキルをより高めていく必要性を感じた。

二 主な質疑応答

Q 探究の時間や教材準備時間の捻出はどのように工夫をしていたか。

A 探究の時間は、国語の時間で扱った。また、教材を制作する時間は、学校で昨年以前から校内で取り組んで制作したものを活用することで対応した。ワークシートの工夫についてその効果はどのようなものがあったか。

Q ワークシートを俯瞰できるワークシートを作成した。見通しがもてるため、児童が意欲的に学習を進めることができた。

○その他、並行読書を用いた言語活動、自由な話し合いを導き、「博士になるう」というゴール設定等に質問があり、児童の反応を交えた回答があった。

三 助言者講評

全国小学校国語教育研究会 顧問 小野江 隆 先生

○学びの主体性・共感性・自己肯定感の重要性、国語学習の中での活動・協同的学びの意義、学習指導要領が求める「自分の考えを持つ力」への着目など、現在の教育課題に向き合った授業であり、着目すべき実践である。

○ワークシートの工夫により学びが深まることで今後のさらなる児童の主体的な学習へ発展する可能性があり、楽しみである。

【文責】 茅野 克俊

【第三分科会】あの子が学んでよかったと思える文学的文章の学習をめざして

〔五年〕「大造じいさんとガン」等

発表者 山口県 防府市立華城小学校 村本 涼 先生

一 主な発表内容

○単元で授業を作る：単元ゴールを意識して、一単位時間のつながりを意識した学習展開を吟味した。

○子供の疑問から単元計画を作る：子供の素直な疑問は的を射ており、学習内容に結びつけていく。

○言葉をヒントに考える：叙述をもとに考えさせる。

○これらの流れで、学級にいる具体的な児童をイメージしながら学習展開を作成した。特にノートの記述などから具体的な読みを見取った。

二 主な質疑応答

Q 共通な学習に合わせて学習の流れを考える必要があるのではないか。

A 「学習が苦手な子」がどう学ぶのか、どこで躓くのかをもとの流れに沿って考えると、だれもが必要な学習の流れにつながると考える。

Q 一年生の話合いの具体的内容を知りたい。

A 不思議だなと思ったことをみんな考えていく活動を行った。ペアトークから全体の話し合いにつなげた。授業後半は読み取ったことを劇化して表現したので、話し合いとしては長くて二十分ほどであった。

Q 変な問いを出す子や焦点の当たらない問いを出す子に対して。精読する時間をきちんと取り、どの場面で問いを作らせるかをしっかりとさせる。よい問いの条件「本文をもとに考える」「考えを広げることができる」「作品に迫ることができる」を共有する。児童とのコミュニケーションをとりながら作っていく。

三 指導・助言

全小国研顧問・元山口学芸大学 特命教授 上田 保明 先生

○不思議だな、だけでは課題にはなりにくい。そこで、先生の働きかけが重要になってくる。それによって読む目的ができる。解決せねばならない必然性を先生が生じさせることが大事である。

○問いを生み出すためには、初発の感想をどう子供たちに返し、どうまとめていくかが大事。目的が共有され、違いが明確になるとよい。

○読みは、臨場感をもって、共有することが大切である。頭で考えていることを顕在化し、実際にやってみると、読みが深まる。

○思考のずれを提示したり、子供同士で意見を交換したりすることで、課題がさらに見付かり、自分の考えを比べて深めていくことができる。

【文責】彦坂 真な子

【第四分科会】付けた力を明確にし、子どもの必然から発想する授業改善

一心にひびいたところを伝え合おう 5年生「たずねびと」を通して

発表者 京都市立上島羽小学校 本城 脩平 先生

一 主な発表内容

○「心にひびいたよカード」で考えたことを伝えるという言語活動を設定し、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしながら文章を読み、物語について精査・解釈したことをまとめる力を育成することに重点を置いた。

○「心にひびいたよカード」を書くために、登場人物の行動や会話、様子などを表している複数の叙述を結び付け、「物語の展開」、「登場人物に関すること」、「様々な表現」など自分が物語の何が心にひびいたのか、そしてその理由は何なのかをペア交流を通して明確になるようにした。

二 主な質疑応答

Q ペア交流における工夫は何か。

A ペア交流で面白いと思ったことをメモさせ、違う視点をもって交流できるようにした。指導事項をもとに児童の交流を見取り、声かけで支援した。

Q ペア交流をしてから全体共有はするのか。

A 交流における児童のよい姿を随時全体共有していた。

Q 児童が表現の効果に着目する工夫は何か。

A 表現の効果に気付いている児童と、そうでない児童とが交流できるように声かけをした。その気付きをどう書けばよいかを、気付かせるようにした。

三 指導助言

全国小学校国語教育研究会 顧問 大野 泰弘 先生

○感動、驚き、発見、憧れといった子供達の気持ちや、学びに対する興味・関心、知的好奇心、向上心に移り変わり学習意欲につながる。大事なのは子供たちが自身が問いをもつことであり、本実践はこのことを前提に授業づくりをすることができており、教師の理念や熱意が感じられた

○国語科の果たす役割とは、知的活動の基盤、感性・情緒の基盤、コミュニケーション能力の基盤を作ることであり、言葉に対して新たな発見や自覚、実感を伴うようにしていくことである。

○個別最適な学び、協働的な学びの視点をもって授業改善することが大切である。本実践では、一つ一つの学びが見通しをもって進められており、交流では様々なパターンをもとに展開している姿が見られた。

○教師や子供たちが言葉の力が身に付いたと自ら感じられる楽しい国語教育を実現してほしい。

【文責】光松 真央

【第五分科会】「自分の思いや考えを書き表したくなる言語活動」

―「固有種が教えてくれること」読むことを書くことに生かした段階的な学習活動の工夫―

発表者 栃木県塩谷町立船生小学校 八巻 修 先生

一 主な発表内容

○説明文を読んだ後に、それを生かして書くという複合単元を、統計資料を初めて扱う児童が、取り組みたくなるように組み立てた。

○単元計画は、児童が学習の見通しをもつために必要。本単元では、児童の実態を考慮し、「統計資料の読み方」を始めに扱った。

○教科書には環境問題についての年計があったが、これでは面白くない。人気アニメや二酸化炭素の排出量、人気のパンなど、児童一人一人の目的に応じて、児童が気になるであろう統計資料を探した。

○教科書教材を読む際には、筆者の文章と図表を結びつけた書き方などについて考えさせた。資料を添付することの価値について、論の書きぶりについての両方を押さえた。何が書かれているかも大切であるが、何がどのように書かれているかも大切である。

○選んだ統計資料を用いて自分が伝えたいことを書く際には、手書きやパソコンでの打ち込みなど、自分が書きやすい方法を選択させた。書き始める前に友達と交流をし、どんなふうに書きたいのか話をさせた。

二 主な質疑応答

Q 教科書の扱いについて。内容の読み取りはどのように行うのか？

A 従来行われてきた段落ごとの要約や、問いに対する読み取りは行ってない。自分が使いたい書きぶりを探すと、いう目的をもって、児童は何度も読んだ。書きぶりを学べば、自ずと内容も理解する。

Q 自由進度型学習について。個人差への対応を知りたい。

A 速い子には、必ず二作目、三作目を作らせるようにしている。

三 指導助言

宇都宮市立緑が丘小学校長 皆川 美弥子 先生

○児童が意欲的・主体的に取り組めるような指導の工夫が多くあった。教科書にある環境問題についての知見を深めることは、国語教育のねらいではなく、あくまでも題材。自分が伝えたい内容を題材とすることで、児童の学習意欲が継続した。

○「図表やグラフなどを用いて」というねらいの焦点化のもと、主張から図表やグラフを見付けけるのではなく、図表やグラフから主張を考えた。学力が低い児童でも書くことができたのは大きな成果である。

○題材や書く方法など、一人一人の思考の過程に合わせて選択させることが、児童の主体的な取り組みにつながる。

【文責】小田 千郷

【第五十六回 全小国研 東京大会の案内】

◆大会主題

他者と協働し、豊かな言語生活を実現する国語学習

「言葉による見方・考え方」を働かせる学びをつくる（R5）

身に付けたい力を意識し、自ら学びを進める（R6）

学びを通して身に付けた言葉の力を

日常生活で生かそうとする（R7）

◆期 日 令和八年十一月十九日（木）・二十日（金）

◆会 場 一日目（全体会場） なかのZEROホール（大ホール）

二日目（会場） 品川区立大井第一小学校

台東区立松葉小学校

◆主な予定

○十一月十九日（木）

・開会式 全体会

・基調講演 文部科学省教科調査官 大塚 健太郎 先生

・特別講演 作家 森 絵都 氏

・全小国研理事会・総会・レセプション

○十一月二十日（金）

・公開授業・研究協議・指導講評（午前）

各校「話すこと・聞くこと部」「書くこと部」「読むこと部」「言語部」

四部会の授業を公開

・実践提案発表分科会（午後）

・閉会式

◆大会実行委員長 川辺 章絵（東京都江東区立深川小学校長）

【令和七年度 全小国研 第一回理事会報告】

令和七年度 全小国研第一回理事会が、七月五日(土)に日本出版クラブにおいて開催されました。

当日は、全国各地から大勢の顧問・参与・理事の先生方にお集まりいただき、貴重なおご指導ご助言をいただきながら肅々と議事が進められました。

理事会では、左記の事項につきましてご審議をいただきましたところ、満場一致によりご承認いただくことができました。

一 令和六年度会務報告

第一回理事会(令和六年六月 日本出版クラブにて)

第三十四回夏季実践交流セミナー

(令和六年七月 墨田区立第一寺島小学校にて)

令和六年度 全国小学校国語教育研究会教員等表彰

(教員表彰 溝上 剛道 主幹教諭 熊本大学教育学部附属小学校)

(感謝状贈呈 山口県小学校教育研究会国語部 様)

第二回理事会・総会

(令和六年十一月二十八日 KDDI維新ホール)

第五十四回 全国小学校国語教育研究大会 山口大会

(令和六年十一月二十八日、二十九日)

会報 九十七号、九十八号

二 令和六年度 決算報告

令和六年度 会計監査報告

令和七年度 新役員選出

会長 長沼 正城(清瀬市立清瀬第四小学校長)

副会長 片岡 有吾(石巻市立前谷地小学校長)

副会長 川辺 章絵(江東区立深川小学校長)

副会長 中島 亮子(三鷹市立第五小学校長)

副会長 植杉 義久(八王子市立由木西小学校長)

事務局長 高橋 誠人(墨田区立第一寺島小学校長)

会計部長 市川 こづえ(豊島区立千早小学校長)

企画・組織部長 城戸 光昭(東村山市北山小学校長)

庶務・情報部長 小原 太一(あきる野市立南秋留小学校長)

編集部長 茅野 克俊(西東京市立向台小学校副校長)

研究部長 彦坂 真な子(世田谷区立八幡山小学校副校長)

会計監査 榎並 みな子(清瀬市立柴山小学校長)

富永 大優(福生市立福生第六小学校長)

五 令和七年度 会長挨拶(会長 長沼 正城)

顧問・相談役の推挙について

【顧問】 田中 順子 先生

【参与】 須釜 久美子 先生

七 令和七年度 事業計画

―活動方針―

(一) 研究内容の充実

未来を拓く国語科教育の理念等について、全国組織で研究を推進する。学習指導要領の趣旨を踏まえ、主体的・対話的で深い学びを視点とした授業改善を中心に、確たる実践理論の構築を目指す。

(二) 組織の拡大

加入都道府県、政令指定都市との密接な連携を図るとともに、未加入府県、政令指定都市との情報交換を計画的に行って、都道府県研究会、政令指定都市研究会による全国組織の活動を展開する。

(三) 財政の確立

恒常的な活動が順調に展開されるように、財政安定化を図る。

―事業計画―

第一回理事会(令和七年七月五日)

第三十五回夏季実践交流セミナー(令和七年七月二十九日)

教員表彰の決定

第二回理事会・総会(令和七年十月三十日)

第五十五回全国小学校国語教育研究会 宮城大会

(令和七年十月三十日、三十一日)

会報 九十九号、百号

八 令和七年度 予算案

第三十五回夏季実践交流セミナーについて

第三十四回全国小学校国語教育研究会賞について

令和七年度全国小学校国語教育研究会 教員表彰について

令和七年度 第五十五回宮城大会について

令和七年度以降の全国大会の開催について

全国小学校国語研究所より

十四

全国小学校国語研究所

平成二十年に設立した全国小学校国語研究所は、これまでも国語科の今日的課題の解明に向けての研究に取り組み、その成果を発表してきました。

今年度は十七年次の研究になります。昨年度に設定した研究主題『「言語力」の育成を目指す国語科指導法の研究』と『「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とする授業づくり』の二年目の研究を進めております。

昨年度は、「読むこと」における説明的文章を取り上げましたが、今年度は昨年度の成果と課題を踏まえて、文学的文章（「スーホの白い馬」「大造じいさんとガニ」）の読みについての研究に取り組みこととなりました。

これからの時代を生きる子供たちが、文学的文章を読むことの意味を考え、学習指導要領の指導事項を確実に身に付けるための指導法の解明が大きな課題であります。特に、子供たちが主体的・対話的に学ぶことで、言葉を吟味しながら、より深い読みができることを目指しています。

そのためには、教師主導型の授業から子供たちが主体となる授業を展開するために、副主題でもある「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とした授業づくりを模索し、研究を進めています。

これらの研究の内容については、次の通り研究発表会を開催いたします。ぜひご参会いただき、一緒に、これからの国語科授業の在り方について検討する機会になればと思っております。

- 一 日時 令和七年十一月十五日（土）十三時～
- 二 会場 東京都中野区立教育センター
- 三 内容 研究発表（研究の概要について）
授業提案（参加者交流型）

記念講演

演題 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を目指す国語科の授業づくり

講師 水戸部修治先生

京都女子大学発達教育学部教授

元文部科学省初等中等教育局教科調査官

全国小学校国語教育研究会 ホームページについて

全国小学校国語教育研究会では、ホームページを開設しております。当初は、全小国研のホームページと各研究会のホームページとのリンク貼ることを主な目的としていましたが、各研究会で配布をしている案内等を簡易に全国小学校国語教育研究会のホームページに掲載できるようにしました。つきましては、左の要領で全国小学校国語教育研究会のホームページに掲載することができまので、特段のお取り計らい方、よろしくお願い申し上げます。

一 掲載方法

・掲載したい文書等をPDF化し、左記担当までメールでご送付ください。

二 掲載枚数と変更・更新の回数

・特に枚数や更新回数の制限はございません。

三 掲載期間

・原則として掲載した年度の年度末までとなります。

四 掲載場所

・全国小学校国語教育研究会ホームページのトップページの都道府県名からリンクを貼ります。都道府県名をクリックするとPDFが表示されるようになります。

五 提出締め切り

特に締め切りはございません。メールをいただければ、随時対応いたします。ただし、データをいただいているから掲載するまで、だいたい2週間程度お時間をいただくこととなります。

六 問い合わせ先

事務局長 高橋 誠人（墨田区立第一寺島小学校 校長）

電話：03-3614-0103

E-mail: zenshokoken@gmail.com

